

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人 小羊学園

〒433-8105 静岡県浜松市北区三方原町 2709-12
電話：053-584-3337 FAX：053-585-8488
E-mail sasaeru@kohitsuji.or.jp
H.P http://www.kohitsuji.or.jp/
発行人：稲松 義人
印刷所：SRS株式会社
定 価：一部 30円

2016年4月20日
第395号

「社会福祉法人」のゆくえ

理事長 稲松 義人

もともと「福祉」とは「幸せ」という意味だということ。すべての人が幸せに暮らすことができること、それは人間社会の共通の願いではないでしょうか。人類が誕生して以来、人は一人ひとりが、あるいは生活を共にする共同体として、いつも「幸せ」を求めて生きてきたのだと思います。

それでは、私たちにとって「幸せ」とは何でしょうか。これは根本的な問いでありながら、答えるのは簡単ではありません。そもそも「幸せ」とは何かという問いをもつのは人間だけなのではないでしょうか。人間以外の動物たちにもそれぞれ好ましい環境の中で生きることができるとは、犬や猫が幸せについて考え、それを自覚して生き方を選択するということ、私は想像できません。

太古には、生きていくために、また生命を未来へつないでいくために、安全を確保すること、食物を得ること、子孫を残すこと、これらが、個人においても共同体においても、生きていくうえでの具体的な課題だったと思います。そして、その願いが満たされている状態が「幸せ」の共通のイメージだったのではない

でしょうか。

一方、「社会福祉」という言葉は、最初からあったわけではありません。社会福祉(ソーシャル・ウェルフェア)が求められる時代の背景として、自由と平等の思想に立つ社会への歴史的転換があったように思います。

いわゆる市民革命以前の時代には、社会の中に家柄や身分や所有地の大小によつて公然と不平等があり、人々は支配者の作つた枠組みの中で生きて生活していました。支配者たちは、隣接する他の勢力との抗争の中で、自分たちの生活を守らなければなりません。その時代、統治する者も統治される者も、自分たちの生活環境を守ることが、「幸せ」のための共通の目的であったのだと思います。

しかし、資本主義社会においては、それまでの家柄や身分や権力ではなく、自らの努力で(自由に)元手を持ち、誰でも(平等に)、経済力を手にいれることができる。そして、大きな経済力によって大きな「幸せ」を手に入れることができると思ってきました。

経済力をもった国は、産業革命によって得た高機能の武力を背景に、大海をも渡り、他国の領土を植民地として支配し、さらに大きな利益を求めました。日本もかつて、国際社会の中で負けないために、その幻想を追って過ちを犯しました。しかし、敗戦後の日本は、武力による国造りを放棄し、国民の生活を守るこ

とこそ政府の役割だという憲法を制定したのだと思います。

政府に責任のある社会福祉の仕事为国営でやるのではなく、措置費として予算をつけることで民間団体に委託しました。こと委託先が「社会福祉法人」でした。戦後の経済成長の時代には、必要な社会保障を何とか賄ってきたのですが、世界経済の構図が変化し、経済成長にかけりが生じ、国内では超少子高齢社会が迫り、戦後作ってきた社会保障制度の限界が見えてきました。そこで社会福祉基礎構造改革に取り組み、社会福祉法人でなくても「社会福祉」を担うことができるようにし、市場経済の仕組みを取り入れ、支払われる報酬の中で、自立的な経営が求められるようになったのです。

その流れの中で、「社会福祉法人」とは何かが問われるようになり、先月末、国会で社会福祉法の改正案が可決されました。ひとこというと、社会福祉法人については、自立性に加えて、さらなる透明性と公益性が問われることになりました。社会福祉に取り組むのであれば、そもそも社会福祉法人でなくても「公益的」であるべきだし、「公益」のための事業であれば、「透明性」は当然求められるのでないかとも思われますが、それはさておき、小羊学園も新しい社会福祉法人の規程に、どのように対応するかが問われています。

新職員が入職

2016年度社会福祉法人小羊学園 辞令交付式が4月1日に執り行われました。今年は14名の新人が新たな仲間に加わり、各部門に配属されました。新人職員は左記のとおりです。なお、併せて3名の職員が非常勤から正規職員登用になりました。

◇三方原スクエア

竹田 幸菜 生活支援員
山本 美樹 生活支援員
袴田 充子 生活支援員
米岡 伸 生活支援員

◇温心寮

夏目 つぐみ 生活支援員

◇支援センターわかぎ

宮路 真珠美 生活支援員

◇在宅支援センターぱびるす

石塚 紗由美 生活支援員

◇つばさ静岡

新井 真心 生活支援員
大澤 美香 生活支援員
本間 みなみ 生活支援員
望月 麻帆 生活支援員



日本財団様から助成受けました

①助成対象施設

オリーブの樹

②助成車両

日産キャラバン リフト対応車両

③助成額

車両総額 3,264,940円
補助額 2,450,000円
自己資金 814,940円

④納車

28年2月末日

◆日本財団様からの助成を受け、身体に障がいのある方の移動の負担、および家族職員の負担緩和になりました。日本財団様に深く御礼申し上げます。



公益信託基金 市川園社会福祉基金様より助成いただく

①助成施設

支援センターわかぎ

②助成品目

空き缶つぶし機・子ども用下駄箱

③助成額

空き缶つぶし機 165,132円
子ども用下駄箱 220,000円

④納品時期

平成28年3月

◆公益信託基金市川園社会福祉基金様の助成を受け、作業活動や子どもたちの登園時の混雑緩和が解消されました。ご報告申し上げます。ご報告申し上げます。ご関係の皆様には厚く御礼申し上げます。



編集後記

小羊学園創立50周年記念の準備と年度代わりの業務に追われドタバタと落ち着かない日々が続いている。しかし、旧職員さんからの出席のお返事をいただく、懐かしいお顔が浮かびお会いできることを嬉しく思う今日この頃。また50年という節目に職員として自分が携わることが許されたことに感謝。当日は、山浦先生を偲び、また新しい職員が山浦先生の足跡に触れ、皆が一つになれることを願わずにいられない。

街並みの桜が散り始め、樹々の若葉が葉を広げ、新緑を迎える時節柄です。みなさまどうぞ、こころと身体の健康が与えられますように。

(F)

小羊学園を支える会

2015年度 寄付金報告

3月 受付分 304,627円 (27件)
累計 9,272,690円 (402件)

小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座 00800-8-107785
口座名義 社会福祉法人小羊学園
ゆうちょ銀行 089店 当座預金0107785
口座名義 社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。下記へご連絡ください。

小羊学園を支える会事務局(鈴木)
小羊学園法人本部 ☎053-584-3337

稲松理事長に聞く

創立50周年・これからの小羊学園

語り手：稲松 義人(法人理事長)
聞き手：古橋 誠(法人広報担当)

古橋：小羊学園は、この春、創立から50周年を迎えるのですが、かねてから国会で審議されていた社会福祉法の改正案が3月31日に成立し、社会福祉法として新しい枠組みが示されることになりました。この時期に稲松理事長は、施設長を退任され、4月からは専任の理事長になられました。何かお考えがあったのでしょうか。

稲松：施設長退任のタイミングという点では、創立50周年も社会福祉法改正も偶然です。これまで先輩の施設長さん事務長さんたちも、60歳の定年を迎えた年度末で、それぞれの役職を退任されてきましたので、私もそれに合わせたいということです。退任後、再雇用制度の中で引き続き職員としてご尽力くださった方もありますし、退職されて他で活躍されている方もおられます。私の場合、理事長も合わせて退任することの影響も考えて、今回は理事長として残ることになりました。法人役員は、2年毎に改

選されることになっていきますので、再任されなければ、そこで小羊学園での職責を終えることとなります。

新しい社会福祉法人のルールでは、役員や職員ではない方たちで評議員会が構成され、そこで役員を選出することになっていきますので、評議員会の判断で、ちょうどいい時期に理事長の交代についても考えてくださることになるだろうと思っております。小羊学園には創業者という発想はありませんし、私ももともと一職員ですから、時期を見て最も適任だと思える人を自由に選ぶことができず。そのために、小羊学園の理念と使命を理解し、大局を見極めて、事業の実態を正しく評価して下さる方に評議員をお願いすることができるとかどうかが、これからの大切な課題になると思っております。

古橋：新たな評議員会について、今の段階で、何か具体的なイメージをおもちでしょうか。

稲松：厚生労働省から、社会福祉法人の定款準則が示されるでしょうから、

場がもつ意欲と努力を尊重したいという姿勢だったと思います。
ご自分の役割としては、亡くなられる直前まで9年弱続けられた「テレホンサービス心のともしび」や著書の出版講演活動、テレビ出演などを通じて、社会への問いかけに力を注いでおられたと思います。
古橋：今回の50周年記念誌では、稲松理事長に代わってからの20年間はあまり詳しく触れていませんが、ご自身はどう振り返っておられるのでしょうか。



稲松：申しましたように、「山浦先生を継承する」というのが私自身の目標でした。理事長として法人の方針を示して全体を統括して事業展開したのでなく、私自身は、小羊学園(児童寮・青年寮)の事業展開を主な役割として取り組みました。おおよそ家(おおよそ療

育センター)、若樹学園(支援センター(かぎ))は、それぞれの施設で施設長さんたちを中心にして、事業展開してきたのだと思っております。若樹学園は、私も数年間施設長をしましたが、入所者個々のニーズをみて施設の枠を超えた生活の可能性を考えると、浜北を中心にして在宅の方たちのニーズも視野に入れているという方向性は伝えたいのですが、実際には、その後、松原さん、小原さんが中心になって事業展開してきたと思っております。

小羊学園児童寮で高等部卒業後の進路を考えるようにし、アグネスという名称で在宅の方たちからの相談を受けるようになりしました。その延長線上に小羊学園児童寮・青年寮を全面改築し「三方原スクエア」への移転というかたちになったと思っております。

その後、私は南区での事業を担当しますが、マルカート・ドルチェ・アグネスみなみでの最後の7年間はとてもよい勉強になりました。もともと、マルカートは小羊デイケアホームの事業展開の中で、ドルチェは小羊学園児童寮が取り組んだ在宅支援の延長線上にあります。事業の立ち上げの時期には古橋さんが担当してくれたのですが、管理者を代わってもらってから、南区自立支援連絡会を通して他施設や民生委員さんなどの地域の方たちと出会うことができ、また、浜松福祉協働センターアンサン

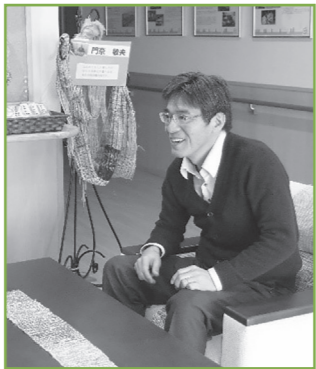
それを見た上でないと具体的なことについていうことはできませんが、市民の立場から小羊学園について考えて下さる方たち、小羊学園の事業に関連する分野での専門的な経験と学識をおもちの方たち、小羊学園の歴史と現状についてよく理解して下さっている方たち、この3つの視点からバランスよくお願いできればよいのではないかと思っています。特に、創立のときから、キリスト教の精神に立って事業展開してきましたので、今後とも聖書の示されている人間観、社会観についてご理解いただける方たちに関わってもらえることは大切なことではないかと思っております。実際には、今の社会福祉(ソーシャルワーク)は、キリスト教的な背景から確立されてきた部分が大いなので、社会福祉の本質をご理解いただいている方と考えれば、そんなに難しいことだとは思いません。



古橋：今回、50周年の記念誌では創立者の山浦先生のことを中心にまとめてきましたが、稲松理事長ご自身は、山

ブル江之島のマネジメント事業を受託したことで、浜松市障害保健福祉課の方たちとも話し合う機会が増え、「連携と協働」によって事業展開していくことの課題を、直接経験することができたと思っております。

古橋：これまで、施設長を兼務しながら理事長をしてこられたのですが、4月から専任の理事長として、今後は小羊学園の事業展開にどのように関わっていかれるのでしょうか。



稲松：これからの時代は、これからの人たちが担っていくのだと思っております。それぞれが直面する課題に向き合っていく、一人ひとりが新しい一歩を踏み出す勇気をもってほしいと思っております。進むべき方向を見失うことなく、信じて忍耐が必要なきもあると思えますし、遠回りをするかも知れませんが、案外、足元のぬかるみが気になつたり、目の前の障害物に挫折そうになつたり、なかなか一歩が踏み出せないことになりがちです。

浦先生のことをどのように受けとめてこられたのでしょうか。

稲松：私に限ったことではないと思いますが、山浦先生が亡くなられたときに、小羊学園に関わっておられた多くの人たちが思ったのは、山浦先生の遺された事業をどのように継承していくのかということだったと思っております。それぞれの施設は、すでに施設長さんたちを中心に運営されていきました。経済面でも日常的なことについては、小羊デイケアホームを除いては、当時の措置費をもとにして何とか運営できていました。課題は、将来、どのように事業展開していくのか、その方向性を示すことが求められていたのだと思っております。しかし、すでに山浦理事長自身が、おおよそ家について、在宅の重症心身障害の方たちへの支援も視野に入れた「おおよそ療育センター」への改築に向けて動いておられましたし、小羊学園、若樹学園に入所する人たちが日中活動のために施設の外に通うことや、旧若樹学園の小舎制を超えて、さらなる居住の場のユニット化についても考えておられました。その後の事業展開を振り返ってみると、実際にもその方向性に沿って進んできたのではないかと思います。

山浦先生は、理事長として法人全体を統括して、法人が全面に立って事業展開していくというよりは、それぞれの現場から、静岡地区と浜松地区に大きく分けられます。特に浜松地区では、法人の中にも複数の施設・事業所をもっており、組織的にも複数のエリアに分けて管理しています。また、他の法人の事業もあります。それらを調整しながら事業展開していくことが求められていると思っております。

山浦先生のことを意識するならば、理事長として具体的な事業運営の細かいことではなく、社会福祉のあるべき姿について基本となる理念を確認し、今おかれている現状を分析し、進むべき方向性についての考えを、様々な分野の人たちに発信していければと思っております。具体的には、これまで「施設」としての小羊学園を支えてくださった「小羊学園を支える会」から、理念と方向性に共感して下さる新しい「小羊学園を支える会」の輪を広げていきたいと思っております。機関紙「つづえ」にもその一旦を担ってもらうことを期待しています。

古橋：編集担当者として、努力したいと思いますが、これからは助言していただければ幸いです。ありがとうございます。